玉淵

子文2
164
3

東京帝國大學圖書
利 317 3
門 ナ 多12 104 3

音曲玉淵集三

夫音曲の起るハ神樂催馬樂等より出る所義也
神樂(カクラ)催(サイ)る樂(バラ)とりて大内神前ハ遊曲(ユウキヨク)にて文樂(ブンガク)なり
沖示管絃ハ役者多きハ万人にて所ゝ事始ら
大きゝを聖德太子乃時分秦河勝(ハタノカハカツ)に命(メイ)して天下
安全(アンゼン)ためハ諸人伎樂(ギラク)ハ三十三番の葫蘆集(コロシウ)ハ三十六番(ヒヤウガ)有
面を作りしめ多乃役者拙(ツタナ)ク略し有る拍唱(ヒヤウガ)奇を
加へ樂をなさしむ其樂を申樂(サルガク)といふ是則神樂
の神代字乃偏(ヘン)を略したるなり猶(ナホ)きも今ハ能(ノウ)の

如くまはあく和哥をのけ兵うちまして一曲一拍(トカヲデ)の事
よあ有しとなり後小松院(人王百代)の御宇に庶苑院
相國義満公(北山殿とも)武家の楽乃こあに其比竹田服部
やうの人音曲の名人をもて仰有て右の申楽を再
興しく今の能(ノウ)こうの起出来なりて今迄なり
きく發向せしなり昔八朗泳(ラウエイ)白拍子あどをもうたひ
拍てし今之堂上方まはまし御まし也拍(ヒカウ)薄あと八今
も各の謡歌ようたをを分ぬすれも地下人なる
歌ひまはあをかされ事ぬ楽

推古天皇(三十人王)ノ時聖徳太子利國安民ノ為ニ天地ノ神
ヲ祭ラル此時三十六番ノ面ヲ作リ桑ノ河勝ヲシテ楽ヲ
作ラシメテ神事ヲ掌ラシムソノ楽ヲ申楽ト云コレ神ノ
字ノ偏ヲ略セルナリ村上天皇(六十六人王)ノ時ニ至テ河勝カ遠
孫秦ノ氏安ト云者アリ三十六番ノ面ヲ傳ヘテ申楽ノ
業ヲ継クソノ妹婚紀氏某ト云者アリテコレモ共ニソノ
業ヲ為リ氏安三十九世ノ孫ヲ竹田某ト云金春ト称
ス能ソノ業ヲ傳フ其比伊賀国ノ服部氏某ト云者申
楽ノ業ヲ好ミ和州ニ移リテ乃チ姓ヲ更テ結崎ト云ヒ
又長谷寺ノ佛ノ告ナリトテソノ名ヲ觀世ト改ム申楽四
座ニ分レテ相共ニ春日ノ神事ヲ勤ム四座ハ結崎(觀世座)
圓満井(金春座)外山(保生座)坂戸(金剛ト称ス)四座ノ分レ山城摂

津ニ在テ賀茂住吉ノ神事ヲ勤メ又伊勢ニ在テ
大神宮ノ神事ヲ勤ムコノ外他國ニモ多ク散在セ
リ觀世カ一男ヲ世阿弥ト云容貌甚タ美ナリ鹿
苑院殿コレヲ愛幸セラレ且ツ其業尤モ妙ナルニヘ
ニ申樂ノ道盛ンニ世ニ行ハレ伶工ノ業コレヨリシテ興ヘ
タリ世阿弥八十一歳ニシテ普廣院殿ノ時死ス世阿弥
子ヲ音阿弥ト云殊ニソノ業ニ長セリ世阿弥弟アリ
四郎太夫ト云コレモソノ業ヲ能セリ音阿弥子ヲ重光
ト云コレハ能ク鼓ヲ撃ヲ以テ名ヲ得タリ
右ハ翰林葫蘆集ニ見ヘタリ

一を稽古といへとも祝儀といへる上ハ天子
より下万民に到る迄能囃子(ハヤシ)を主(ミユ)とするゆ不以之
む拍子こそ事成れ拍子とは何ぞ人の脈なり
作り出したるといひ或は漏刻(ロウコク)より似たりとも云
拍子ハ天生の理にして万物に拍子なきの事なし人間
平生の言語ウツロフより皆拍子なり然るに猶ハ拍
拍子に慥(チヤウギ)必定規を定めゆ乃伸縮(ノビ)に規矩準繩(キクジユンジヨウ)を
備へ之を則大小の鼓(ツヅミ)の如く此定規を定めてそれ
ゆ之を伸縮みのゆるに就ては乃ち
之を作り付し事と人作と云へ共たとへ西國

乃ち其人と奥列乃果の人と拍子揃ひ風合てもてうひ
又とて是下掛下と流義まれくも或は本地の本を行
地まゐたるひゝ枝ハゆ宛ふ其れ拍合あとされよ嬢の迄
て拍子乃定規まつ面く事ハ見かゝ又古流尚流らく
文句ふ一ハゆ宛ふれ習りめ面のまとも拍子にをひてハ首
より今まゝ乃事なるぬハ人間自然の乃理まを叶ひ面
所なゆ元来樂を神代の樂まて而ふれ拍子なり
其而ふれ拍子にのやを付て短くすゝ尺を拍め三川地乃
拍子を定めすれハちとれな和奇れ七五の文字を切倉也
たる義なる故天地自然乃拍子神代れ樂より作り出

世俗不なる事ハ昔より今まゝ多俗ゆかゝ勿論氏未たと
ひ千年を待るとも此拍子我ハゝ乃事ハなるぬ道理なり
古に依ていつもゝる砂糖小井角なく同しゆを猶ひ義
ても度と迄奥まゝ嬢なりゆれ音曲乃祝義まゆひらき
ぬハ定規の拍子なき故なゆ樂
一論ハ元来長歌をつゝ祢ゝ和故文句も五七五七とわゝ俗ゆ
是和國れ風なり七五倉也て十二の文字数まゆ而なと拍子ハ
つ也氏時ゝいまゝ大小の数もわゝぬ所是拍子れ盤觴也
拍子ゝも十二の文字不是れ対ハ数乃ゝけ声をかけく
十二の数まゆ倉すゆり

望つまくさういまこ羽さるた　・十二　ヘ　ヰ切て出る出ル

芭　あにちう紀ろうたいそ　十一　ヤトうけて十二

浮　人かゝもなりしく　十　ヤアトうけて十二

彩　ところそきくろへれ　九　ヤツラトうけて十二

柄　きにやそゝをたく　八　ヤツヲハトうけて十二

数　青陽のちろれかゝしまハ　十三　かげの拍子てせいノセ

曲年乃出に陽す拍子有ハそゝかへて式格也　字ヲヰ切ノ円へ入ル之

白　やまとのそに　引元　文字六ツ

光　わてうよりもお城　行比　文字九ツ　一ツ比氏云

かやうな様の羽文字ゝゝなり出来是ゝ随ひて拍子

もものつと結ゝゝすせちまうも同一節同一拍子に

汁ゝてハゆやをなすゝなき故ゝ文字れ色ゝ見を梅

ゝかく或はゝ一引くさゝ或をくせをこひあゝゝて

拍子れ各ゝゝくゝなたり数も勿論多しれゝのやを梅

てゝもゝ各ゝをひくハ遠ふ事ゝゝゝなり

東　生をうゝゝゝまゝせく　十一ヘ　ヰ切出ル出ル

桜　ロいまゝ川のゝまハ郭

車　をゝそみゝれひをゝゝ乃　十ヘヤ

斉　梅をハ柳ゝこれをちゝう

清　かゝまけ乗ゝゝゝゝ　九ヘヤア

盛　八ゝゝゝゝたけゝまひぬと　十二

安山 まつかさのりて
伐木たうくうて
実 まさきのりり
茂 ろくやくのたやの

柏 一番りふる村たれ
拵 老かとい行て分かし

八 ヤワラ
十 ヤワラ
七 ヤッシハ
九 ヤッシハ
十一
十二 かげノ柏
十四

※式文字数多かあきともふ一の松合伸ちみま
みなかの乃巻りの定格ま合へりなり
但かのの位ふハ又別仮のをしへ也

一矩乃柏子れ事

右ま不ま間一尺 大数の弓ま寸 小数の弓ま寸
手上も一尺 手切も一尺 定ル文字十二也
引取ま寸 定ル文字ハ也

行地七寸五分 定ル文字九つ也 ヨクリ一尺二寸五分
如式寸ハま定ての教へ也依去引ル二つをか間一ッ也引ル
行地ト 倉て一尺二寸五分ニ必故ヨクリの弓にあ小也式ハま
キサミ也ハ手切の略五寸の弓也大カヘシハ二尺大祢 或三尺
四尺の弓也 定ル番数 全剛正ミ上掛下掛 番数定有 拵恒老かの手切
胡長 三世十方の手切 蛮式筆の拵手切 是ハ五寸の弓ノかげ
数ま間ハ弱く弱ル多を手也 筆秘傳の柏子関寺小町
或ハ種物笈に各か完変ハ仕ル右の内より出ル柏
子なり 内間ハ柏子の内大数四ッ小数四ッ也文字数
十二の内七文字ハ大数の弓五文字ハ小数の弓ニ定むまこも

元来ゝ六六トまるゝ也ゝくゝ字より大数ヲ
故まゝ字ハ空まゝ切り明さ高ゝト小数ヲあゝ字より
ゝいまゝゝだゝ字小数ノ和ハ空まゝて平竟六六ト
数ハまるゝ心也

一両なゝ拍子規矩の圖

小拍子 引元 ヤ ら △ す △ か 地 ゆ ・ の ・

地 ヨ ろ ヘ む △ ら さ △ れ れ す ・ ま こ ・ ろ ・ も ・ き ・ ま ・

引元 志 の ヘ ふ ヘ ろ ・ み ・ さ ・ と ・ ま ヤ ッ ハ セ ・ ら ・ ま ・

地 ま イ △ ち △ う △ す △ も △ と ・ ち ッ い ・ ッ ハ ・ ま ・ ま ・

相場 ヤ ア △ か ヘ か ・ し ・ み ・ の ・ む ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・

地 た ア △ ま △ ア な △ こ △ ま イ ・ さ ヘ き ま イ ・

地 ヤ ア △ さ △ ん か △ い △ ま ち ・ て ・ し ・ て ・ な ・ ま ・ ま ・

地 ち ち △ ち △ つ ら △ こ △ ま を あ ・ ア ん す ・ ん ・ ま ・ ま ・

地 ま も △ ひ の △ に は △ け △ ふ △ て む ・ 祢 ・ よ ・ み ・ つ ・

設高低 カタ 地 イ ヤ ヘ ア △ ハ ッ ッ ヤ ア ・ ・ ハ ア ・ セ ・

地 い ヤ △ う △ 乃 は む △ ま れ あ ・ し ・ ・ ・ た ・ ま ・ ハ ・

地 た ま △ の △ と い △ つ ち う ・ く ・ ひ ・ ま ・ の ・

地 こ ま △ ま △ ま ち △ ま △ み △ と ・ け ・ そ ・ め ・ て ・

如此十二の文字数ゝ両なゝ拍子ハ八つを切合たゝで四乃文字
空ゝ切所皆ゝ引元ゝひゝなり此ゝひを手へ拍
子にかゝれゝまかまちゝ也也して笠ひちゝ花も速速ゝ
両なゝ拍子ゝくゝ乾天地自然の拍子なり

同乃まて強ゑ所

	ヤ		ヤ								
	アそ		らアア		ヤアア		セエ	えまた	の シ	ヤアま	うよと
			を		ひ		た		法		
	のラう		ヒさ		イは		アんさ	たしを	シたア	うひさ	ひうし
	きよ		ちゆ		ちせ		きまた	ちまた	ちまた	ハあゆ	ハアあ
	けうこ		ちけ		うを		ちこ	ちこ	エシま	ちえた	けをん
	ひしへ		ひ		ひ						

同ゑ世て汎ゑ所

熱坂	ヤ	ちつ	ー	こ	う	り	こ	ゆん	ま	へ	こせ
	ヤ	をつ	ら	け	す	う	さ	す	こむ	な	きあ
	ヤ	ひつ	り	と	の	ま	ち	え	む	き	る
											な
											ー

うゑ人なれ拍子弦むるよあて
何よき記やうしハ苞まも角まと

一氣

字彙ニ氣ハ元氣也又息也

禮記ニ下ル氣怡聲ヲとゐ元来聲乃生所ハ氣乃充所ゑ有也氣をおさめ息弦ゑ声を發ス聲ハ呼吸ゑ二ツゑ氏息接をゑ氣一身ゑ不滿して腹空虛す 虛心實腹トテムナシ虛ニシテ腹ヲ實ニスヘシ云云 腹空虛すれた

息外へ洩さて内へ下らん内へそゞろれて或はたゞひ口
ちひさ舌唇の力をうまく息をうゑ氣飢ゑ死あと
なり但ちめより氣の充血を欲して腹をうれで又ゑう
乃ちきみこゝろなり先氣をたゝあ息をうへ歪く
扨調機聲よりまは岳まゝ内へ反ゆゑ腹も自
然とゆくなり

一調二機三聲の妙

音曲の玄旨大事也

元傳書曰調子を先機を拾ひ吹あれ調子を祈りて
機を合せすまして目録ふまれ息を内へ引て初声を
せはたゝれ調子中より出ゆゑ調子えりを祈

りて機を合せすゝく琴を玉はゝたれ調子に合ず
なり機にこゑく声録出れ故を一調子二機三聲とは
定むなり

十二調子律呂之辨

上古黄帝の時伶倫と云人命ゝて嶰谷と云所の
竹をうて始めく十二の律管を作りしめたゝ先十二
月乃調子なり是一年の始めは十一月冬至なりされ一
陽来復の時節まて一年の暦もこの時定むゆゑ
されを十一月を始めゝ律の名を黄鍾と云日本にて壹越なり
十二月の天地の氣を表したるハ昂ち卦なり十一月の

卦の名を復とゝ

一陽メト云　一陰メト云　氣ハトヨリ發ス卦モトヨリ畫ス

復卦	臨卦	泰	大壯	夬	乾
一陽五陰	二陽四陰	三陽三陰	四陽二陰	五陽一陰	純陽
十一月子	十二月巳	正月寅	二月卯	三月辰	四月巳
律	律	律	律	律	律
黄鍾	大呂	大蔟	夾鍾	姑洗	中呂
壹越	斷金	平調	勝絶	下無	双調
子時	巳時	寅時	卯時	辰時	巳時

姤	遁	否	觀	剥	坤
一陰五陽	二陰四陽	三陰三陽	四陰二陽	五陰一陽	純陰
五月午	六月未	七月申	八月酉	九月戌	十月亥
律	律	律	律	律	律
蕤賓	林鍾	夷則	南呂	無射	應鍾
鳧鍾	黄鍾	嚮鏡	盤渉	神仙	上無
午時	未時	申時	酉時	戌時	亥時

如此循環して又一陽来復の月より及て黄鍾壹越の調子になり十二律とゝ八調名まて分ちいへゝ十一正三五七九の六八

陽月を律とし十二二四六八十の陰月を呂とするなり律ハ
法なり呂ハ助なりと有て（礼記礼運ノ注也）律ハ法ニ象る義也
呂ハ律を助くる義なり妻の夫を助け臣ハ君を助くる
同一義なり男ハ女を統べ君ハ臣を統るが如く陽律ハ陰呂
を統るゆへ兼合せて十二律と称するなり
右十二調子の内五調子を主とする調子を
壹平双黄盤　以ふ調子とて十二調子を統合せて
なり然るに又調子を熟煉せし事音曲の要法也
壹紙子鈴　金うちに平ハ寅
勝卯絃　下辰　双調ハ巳ノ

亀鍾　むま黄鍾　ひつじ鸞ハさる
鸞酉　神戌　仙亥　上子　丑
△断金ハ　壹越より出る　△勝絶下無ハ　平調より出る
△鳧鍾ハ　双調より出る　△鸞鏡ハ　黄鍾より出る
△神仙上無ハ　盤渉より出る調子也
十二律ハ竹来絲竹の調子にもちゐたる物なれは上古の
神楽歌催馬楽等絲竹を合する調ひ和する式調子等
一ツ吟味せるべへ　謡曲ハ調子ハ能囃子素謡其時其
場の相應を才一として竟絲竹ハ律ノ合する物ノ
あるハ呂ト地声トハルトするきト又たぎりてるきト又位也

然とは壱平双黄盤の五調子にて是なり此五調子即ち五音にて十二律ハ是つゝ籠り十二律分きゝ時は五音明らかなるゝ故に古来を多くこれ述たるとゝえあり

五調子	五音		五音通	五季	五方	五行	五色	五臓	五味	五穀
壹越	宮	アイウエヲ ヤイユエヨ ワヰウヱオ	喉	土用	中央	土	黄	脾	甘	口
平調	商	サシスセソ	歯	秋	西	金	白	肺	辛	鼻
双調	角	カキクケコ	牙	春	東	木	青	肝	酸	眼
黄鍾	徵	タチツテト ナニヌネノ ラリルレロ	舌	夏	南	火	赤	心	苦	舌
盤渉	羽	ハヒフヘホ マミムメモ	唇	冬	北	水	黒	腎	鹹	耳

右五調子をつくさゝりて四季方角を配当せ一なり色にゝよりて或は時節変なゝ双調小向の度変なとハ盤渉と異合なる調子まて徒ふて物るへ一とヤ伝ふなれ共冬小向の度変なりとて神めより盤渉もふお意必へ一調子ハ平竟臨機変変して其時よのうしてハ相意する事もふ変なるもふ秋ハ平調子出一たゝ物ふ能くと貴人なとゝ言音にも強ふ時ハ変一て其調子よつゝでハ叶ハさる事なり勿論音とハ独吟ふても大度変小度変なとの弁へなを近笛ふ能お意も有へ一只功者ふ物ふ一をつと相意ふ調子出へふ

如〜て助音をてこ〜或は同音あるとの時ハかれ視ず
を字合とろかやうに視ずの約安なり

附 初心の人日音の時視ず遠ずと思ふ〜一ムさり視止て字合すし

うこうんとてうしをむきくはしく
短う考こと成まり視ず見し
さしちうく徳ず視ずを双視ず
乃ちそ莫蘊 盤法もよし

一機

説文ニ主發謂ヲ之機ト とゝて何ずらゝに物を發生し
動事をはるさとゝ機の一字に持ち乃字意あり

それ故大学に其機樞とある注ずと機發動所由とゝ
て所由とゝずハ善悪ともに國家に大事ずはるゝ
上ず付てかやうにはゝむかハ何故ゝと發ずを指て所
由とゝひ所由が即ち機の字に義也と釈〜く機
乃字を事のキザしとゝずの注あり又其ずる機弩
牙也とゝず注して大全注也 弩ハ大弓ずて其弦をかゝゝ
ずをオとゝず機が即ち其弩牙の事也と説て先
ハ機をユハヅとゝず訓義ず見て矢を放ずて中所に
つゝはハヅのさゝれずにあゝと所説あり又易ニ言
行君子之樞機也樞機之發榮辱之主也とゝて家

まこと言行の善悪より付て其起る所を門戸のくるゝ
うのハヅよりたとへらるゝ又木偏の幾も通し幾
密とちがきこうの字心まて書經に人君の政をさゝく
一日二日萬幾とのたまを（一日二日ハ毎日ト云心ニ）萬機とも書換て先は
政事ハ大切のすゝめ也又極綿密よ謹を用ひ行
ひ出すべきすゝめと其政のかなを機とひらく義あり
又孟子に機変之巧とあり莊子に機心機事などゝ
ハ事の便利をたくみまどそを考て心を使こと
アヤツリをなすをさしく機と云てあり又たくを
織乃具よ機杼とよめあり先ハ梭の類ひらき

撲糸をつゝひきもれなやうに糸ある通具
あり是れ也機乃字を主にハ人とも訓する也孟子
此毋乃孟子へ問懈怠かゝやうふとすゝめたため
織乃字を絶断て見せまたるとゝ断機と
有あり也して此機の字ハさ無くれ義つれともあ
らまし先ゝ此字心まて畢竟ハ説文の主發とゝ
乃字主戒よ帰する事あり發する所あり名れと音曲の
根元を考へ機乃字を大切よ事也花傳書乃
一調二機とある機ハこゝろを外の孫乃書に大きこと
た織所うへ乃義のこゝろ堅いと撲いとのつゝひやう

よて名づけ紋柄をあすとして所をかくて祝ひうの
何やら引合せていかりむすあるやうなれども実を
機乃一字は沙汰もなくなく胡機聲もに合せその
内よりとなく声のたくひやうを主として説なるあたる
所あり去ばう三条に名城左ゆうへ一ぬはしの
義を明らかにまちがへきなり聲はなりやをな
すれば又別條乃沙汰ぬへし三条は中まで此機と
つあ所要あり故と明へし

一聲

声ハ身ハ内の風まて脇下丹田よりはし肺ハ腦を

門戸として喉へ出るあり先風の義を明すへし
莊子ニ大堀之噫氣其名為風とて大堀ハ天地の皮也 噫気ハ息也
之来風生於空谷こゝひく大山の谷底大海ハ渊
竅より吹出るものなり人ハ聲ハ分乃内ハ風まあ
真言の書なとも人身中有風名温陀南是云丹田
とあるあ丹田ハ臍と言りたる所敢なく人身ハ空谷乃
やうあ乳場所なり人の命府氣息乃根なゆへに
道家まて吟吸吐納ハやーかひる丹田を守ることを
事成主ゆうて説も見ゆへのゆせられて天地の息
ハ風まて風ゑ昂ち天地ハ声人ハ丹田乃息ゑ声まて

聲ハ即ち丹田ノ風なり天地乃間に充てくも風ガ充
くれて天地ガ充てる人の方よ息ガ絶ては生命ガ絶
ぬなり声を腎ノ脈より出すと云へと尾ノ下ノ腎
ハ水府にて形不ハ脊ノ属(ヨウ)し歌ありて量ありてき
らめをつゝさぐりみぐりに浮動(フドウ)せねを動く養ひ
とするものなりされども腎水ノ精ノ氣より毎丹田乃
田地を常に潤(ウルホ)し者ひあり氣を動く聲ならか
ときは声ハ腎より出ることなれ尾ノ腎より
ひゝさゝりて声をなするまてハかゝ水に水分ノ
助けを以て生ぬ故聲ハ腎ノ嘯(ヒガコト)ものなり喘涸(ニハカレ)

たるとき或は大音もあれば又小音もあり皆人て生
分ノ腎氣の色ヨリ伝てのる也変ハ人と生得乃
上にかゝるなり所ノ人の聲ノ発変を見て強曲者ノ
うへまてハ邪(ナニ)せんとれ人ノ方へより一調二機と立く
声をは主にいひうり板聲ノ丹田より肺乃脈へ
うはり肺より口へ出ることて三切ノ階級(カイキウ)ありて出る
ハ行ノ法に変することなきは一枚(ヒイ)なく生ぬ也ノ
て遠ノ声ハ上ノ下なく非を皆脚下(サイカ)ノ乃変
と中ノ人き事ありた尤なる知ノいうとなれて右ニ
身中ノ氣ノ風ガ外ノ風を引て丹田ノ氣ノ声を

起し齗歯唇頂舌咽胸の七所を觸て喉内舌内唇
内に轉ずるなりて移しの音聲所なり事な
ほ初心の猛人はあくて丹田呼吸のつかひを知
ずして口内より声につゝと出るなり或は声甲にて
へとり續きなる声ばかりふ自由に発なりて又初心にても
をき声にて胴声とゆるなる気ハ機にあつかひふ自由にて
發する弱き故ふつてたにてもよろかなくいつも寢声
のやうなゆえ勿論声ばかも聲のきてゆやうなゆえ又
或は胸計なるにて下へもありずもりよろかもなく音
声中なる計にて同音なるてきろなもを大なるハ胸と

上にありて下音用けなるなり是皆丹田と肺と
口と一枚なる機に扱ひを知て偏所にて息丹田へ
もとゝ取なる依て也又声といひ音といひなるなる
気ハ別条なゆへ いまは三所の
内にて機を主とする決ハいくたとなるまはなるへ音國へ
旅立する者が俄にありしなる旅具ハこうらへもせん科ハ
なる度もなく急なる發足して路次にて困窮一人若
し死有根なる如く機の工夫を知ハ口に任せ飛出
し海ハ行商にての困窮なる事なしても笑止成なる也飛子の
事ハ前にもなる通り其席にて時節扶持
景氣なるよりたる事故気ハ常と俗なの内なる筋なり

されも強くとするに気が実(サイ)初れ心にくへき所なり
むりくらり時の調子を元あへすといふ場なり扨機とい
て強出る上音中音下音高く成上高なれとも一
概(タイ)なりて出せは緊(タツミ)上りにかるく息つゝひかく隨
て声もよく嚙(カミ)下高なれとて虚弱(キヨヒヤク)より引ずやうに
視し出せは心入く入り吟へうはの不なく一ッたいはなり
す笛角上音なは脇下を沈めて息をなり下音なハ脇
下をなり息強ゆるく強出る是即ちハルハし(メル)ゆ(ル)ハ
ハルといふ不れ根本也笛角宜初より氣を静め歪く扨
調子を考へ息強義て脇下をなり強ひ出さるるく

又ハ息を後めて丹田へ及(モヽ)し扨調子に乗して声を発(ハ)
へ一ッ〻び息を緊(コハ)く真(マヽ)に出せはうるさく如くなきみよ
吹なり一度丹田へかゝれ不大きな益(エキ)あるなり也出術なを
捨て二ッ附くといふ事もかやうれ所なるへし万事に
御くに出来不別するも式法等一機の工夫やし
なひといふ世不乃多也度度をなくと会得(エトク)する時ハなき
調子を受ても若しまれ記きくもはまり歩下音呂音必
自由になりて付小高くても調子にうつり角合音使ふも
よく拍子の意味合を其一分くれ自由働る所へ何也
よも其生也付一ッたいのうけなるねこと不ハ法義とを

に皆修りの未熟ゆへあり殺言幽玄嘉慕哀傷より乱
曲まで多くまて年竟式程をきへ合点せはふ〻々也位分ハ
其物これ上より付習係する迄のうまて遥に先所より及
てハ見よろ面〻むつ〻ちとかつ事ハ有まし遥曲のミ
よ浪〻ひと移〻くれうたひ物乃修行より世間機聲
の工夫所要たるへし

一音聲の辨

説文ニ音声也生於心有節ニ於外謂之音ト宮商角徵羽聲也

金石絲竹匏土革木音也

字彙ニ實而精者曰声ト朴而浮者曰細音ト

毛詩序ニ聲成文謂之音ト

礼記月令疏ニ單出曰聲ト雜比曰音ト

書經ニ歌永言音依永律和音ト 書經ニハ音ヲ二字ニ声ノ字ニ十ヒ註ニ音ノ字トアリ

声と音との分別ハ聲ハ何乃ふべもなく高低ニ出る物ありそれを文沢多ハ付ハ文まて是音也とよへ
カキクとふやうに絶一より出るハ聲也それを長ク
ハ付てカアキイクウ或はアイウエオと如きハ声也
ふべのまをうまてかやうの物を音とふ也文故音ハ字
乃ち訓をヨトモヲトヒよみて年竟声ハ聞きもの
ひゞきハと声より發するゆへなすぐる見をコエと訓

せりふは文といふと音の事也 正字通に聲は音對言
則別散則相通とあり 来声は俳音に用ゐられた声
乃ちて音に渡らぬとふはなく音として聲より出
ぬはなし また相部きさう流に古今れ書る聲音の
二字は通用して見を筆せり宮商角徵羽を又音
とも又聲ともいふ也 去形ふ拾遺くれ物よ所ゆれ中
ゆり上に強く其主とする所を以ていたく各辨別を
有へし 今日人は靜る物語もう声なり其ふる去
或は怪し笑ひ又は物を嘆息する事なくまは音の
ま事ふうあれも主ともう和ハ声なり書く風く

呼ひけなどしてい付ハ月花と吾琴もく えぐきまん
見ハ音なり又遥の一むきよ強くいへ 羽ハ声ふ
不を音いも分りへ 乃ち羽よ音の入不ありふ乃
内ふ声を部きされを主とする所をまちいへを
西りあり名歌乃きへづり鳴る風水は えぐき金石
絲竹 鮑土革 木は八音のたりは鳴物ハ勿論音也
強中 接ぬく ハ音は むく大物物なり是をりく
ちいさ知物は音も亦類を振て知 年貴徳の
声は内に鳴物遥物ハ聲乃 ・ひを腕不ゆうに用
みを行要とする故それよりも音を主として

音楽といひ音曲と称するなり　長短大小清濁高卑　見まて音声トヲ考へし

一聲れつくひやうの変

声を学にはふて吉甚宮市よつふを者一され

いうとあれを肺れ臓を五臓の花蓋(ケガイ)諸氣れ元(モト)なりを

以ふ又行ふ配(ハイ)してハ肺の臓を金。腎(ジン)を水なり金生水れ

道理まて腎乃西に肺ハ母なり故ふ学に肺ハ腎へ

水を合力するなり強きとも冬ハ水れ主(ツカサド)ふまて水(オカ)学へ

なり故ふ肺(ハイ)ハ合力を諸れ依て学ハ肺れ学へ

あきは多聲ーても肺氣つれを肺腎ともにさかん

肺ふつくひあふせん西に学へ学を也

枝はひやうさ海くゆ侍へ見ありと以ふも其人相恵

乃調子まてる音下ちも自由なるやうにつふてよし

下音れ人とかはくる音にたひ聲はいつとなくる声

ふ流りのあり学に調子ふきく人と敵(テキ)と和(アフ)ふ対ハ流

第に声ふく聲ふ月前ありむ其人れ聲のむきもふ

又氣力も依へ先撲(ロウ)の声をすり竪(シユ)れ声を女

押(ヨウ)てはふへ撲竪とも声にある声を相音(アヒシン)ふ也

花角聲れむきたる対失ハ〆とつふをこ恵を

たふて能声を起ふつくれて能声有へし　暁聲(アカツキ)を

つかふくハ少食を用ゆる元菜を春て吉枝又つふく

度々有へうしいぬるはほうこと也宝年
毎日毎夜つゝみ鼓を聲喝(カツ)遣とも来に到りかつゝう
こ能出るありたよくかゝる能出るあなり返すく声
ゝ出所つゝしを能味してたゝへ出不住ひこと能
悪くれたる益(ムヤク)の事なるあなり諸文若者ゝ人元気
声の変(カハ)る場をきゝにきゝへし但生得(ミヤウトク)師氣ゝ弱き
人ハ一向声ゝさを好まぬあなり

我こをこ文ゝいろよつゝひをきく
ゝ為やすく志音曲をせよ
何ゝなにゝ能ゝぬ物能つゝよ変

かゝるこゝろ能ゆるすな

○ちき聲をほそくあすへきやうハ廣野又を川の流なと
ゝゝ鳴所へ出てゝ能調ゝゝて貫暁ゝ声をつゝて返ゝ
度変なるものゝふも能ゝたゝ所ゝて祝へゝ変ゝ心ゝ変
人の耳ゝを細くゆゝめゝ能ゝあなり

○細能声能ふくくなゝこゝやうハ木陰なゝとゝハハ川くゝとも志
びきゝれゝあゝこゝ不ゝそゝいふも志きゝく調ゝゝて口ゝ内をゆゝ
ゝこゝ指口能か廣げて祝へゝ能ゝつゝし入ゝまゝはゝそゝくゝそゝゝゝ
一時(スリコエ)音乃事

能ハ出ゝ聲ゝを変せゝ不へゝゝゝゝぬやゝに胴(ドウ)乃内ゝそ強ゝ

事なり但上より柿ものもあんかすゑ物よ形ん[illegible]やくよ
をたつ者丹田より声絞出し腰へ満つるやうよ祝ひそえゆ
ゆゑ也それより腰とこの音にあげ又腰こトケてかの丹田
へ反してもつゝび武教通するなり足をつふ時ハ声の
出不を足下音自也にあ[illegible]あり事竟島をたゞひ聲
音ハ源を探る工夫ぬ[illegible]
○すり声工夫のゆ足足ハつまさゝを組臀をゆ乃せ膝を
く迄ゝ腰を突出し島絞呑事 初めをナツ中よ
ゝ絲の上ハ三五十迄も動る板島をゆるめて出すゆ一ゑ
ぬ武すゆ事 教通に及ふ時をのづと氣治まり胴の内に
島満く自然と腹ゝ動くなり其時丹田より聲ハ出ゆを
見えて胴乃内をうたひ工夫すゆ也 往口傳を待ー
儒道ニ 靜坐 或未發ノ工夫 佛家ニ 坐禪 或ハ直指見性
武藝ニ 練 或ハ保ニ

世ゆ絲ハ流ゝ又弱ゝその發明彼吉是吉と云ふゆ事竟
丹田を絲事也祝ゆを座ー澤らぬやうに祝煉す
ー音曲ハ發声すゆよ奏ハ氣勢ゆ弱ー先小
伝て学に氣を主ハめて音聲ハ出やうをゆ工夫也
神道ニ
人者乃天下神物祭利須掌靜謐 とあり
ゝ我ゝ一ゆを額よてゆる如く伸き腹を突出ー祝へは

声ハ裏ヲふき出し表ハ通り聲ニて服より出る横
其後すぐ表をするも可なり是初心の用ハ必ず吉

一聲ハ横竪の事

一人うたふ時ハ竪ハ声を伸ばして幅せぐるぬやうに強
強し同音乃所ハ横乃声ハ表ハ書ニ祝へ竪乃聲
たるまてハ同音をつゞけぬものなり

一響乃事　字彙ニ影之隨形響之應聲ニ其捷一也

響ハ音声ハ強り調子よ強ふ也廣き場所狹ハ場所
まて強ふ差別ハ式ハ書きにも後令丹田より声を出し
幅をとるふとも響き強ふ上へ引きやうよ心へし同ニ

聲の出る事ハ上より出ひて口上音ハ下ニ入て音曲ハ
なり又口入を嬉ふく上へ引ぐ又中ハ上ニ上ぐ
式場別してむりし 但小強ハ強ハ後ハ切居不或
口上端の同音へ後ハ不口上音ハ上ニて祝ふ方引ぐきの末必浚ぎ
をおもりかやうハ所をか柿やう分有へし 且て腹乃
ちるやう発ハれて響ハ呻ものやうよ発ハ表ハ嘲めく
腹ニにものハ又鼻へ引ぐき 先ハ唇内のかゝれ口中のこゞる方 或ハ不へ引ぐく
をきらふ表ハ柏子あひ白切ハ
白切文ぐハなもの白切引ぐきハ止やうあくてハ表ハ
柏子ものハ又柏子なハ所も響き邪ハ広ものなり

句切ハ只えぢきれ止やうも短大事也

幸 △山ハあさ紅ノ葉を敷

芭 △えぶハ花乃音よのこゑを枝葉

はみノ字ノあとゃの弓ノ出故みイと切てあとへゃ声をうけ義

なきをイよえぢき有て終ノ方邪ナるべし

三 △入相ノ鐘よゃうハ鐘をもちて

ハよノ字の引もゃうとゆ遠引てゆとへハ 声をうけさま

べきと知き終りてハ邪ナるべかり

一息はうひノ事 一呼一吸為二息ト

息ハ音聲ノ通ノおのれもつくしやう変れを声れ

形ノ変也之氣をおさめて息を調ノへ

論語ニ 屏氣似不息者ニ 莊子ニ 踵息スこゝ氣を木さ

むる時ハ息を怯む 芒ハ祖先ね 叔聲を發するとハつふ

息をはうでハなるぬ事也きれも息ハ慣て書ノを

ノ字息出る声より見遠ゆへ息を吸事も出

て下する外へ向き方也心にさゝふハ心乃動きにかに

随ひて息ノ緩急あり 膈喜の相さかう息に孔ノ

事を知へ 也て息つくひノ陽ありをえを湖ノ男

激女沒れるる如 元来呼吸を陰陽ノ分て呼を陽

ノ字息 吸ハ陰ノ入息こすれも伝にきをつゝひ息

發もうとすてハ陰息こてふハ陽ノ 以上ナトケノ依て發声の

四よりなり其陰息ハ即ち陽息の助けこなり聲の養
ひをなすものなり初めに強き陰息の陽息の
こをもつて強き息に息も不足し或は清濁に
ぬくト音の自由になる皆是陰息乃やゝ強ひを動弁せ
さる息なりうへまて孤の内も下まく強き不ると皆それ
くよ強ひて陰陽乃息あつゝひ後ハより但陰息をも
らとすれを又し入やうよ必也多くハ口傳ありてハ明ら孤
又曰呼より吸ようる示に相を能く工夫すべし
△也ーて引不るは陽息陰息の区別を
△ハル所を陽息なれも拍子なきに陰息を用ゆる不也

△九不ハくり上て陰息ぬへし九ハ律より陰少陰息を用ゆ
△入ル不ハ陰息也 但一字バリハ入ふるよ但て陽息なり
△巳ス ふ一ハ陽息より陰息へうるなり
△すぐ必ふ一ハ陽息なれもシトスふ一の前或は句切なと
まて陰息を用ゆる所有
△下ル ふ一ハ陰息なり
△中さげ イロさげ 但さげ 陰息まて音ハさげぬなり
△シトス ふ一ハ音息なもよ義すなり
又息遣等の事ハ代未記て述之

一呂律乃ものもの事

九ノ和カ之　カドダテ　堅ニ

笑　泣

ふゝ　かゝ

呂　出息ニテ　祝言トス　律　入息ニテ　愁トス

聲ノ表　聲ノ裏

笛ノホウ　笛ノヒイ

音曲乃強吟も和ハ呂律ハ之なくして事なくよ
ゑ遥ゝ示ゝ也又下ゝて孤ゝ所ゝも他ゝく呂律有相
呂ゝと之高角徴羽の五声律ゝと之高角徴羽ハ五声
あり年竟宴ハ呂ハ之宴ハ律の商かゝく孤ゝりけてそ

くゞくゝゝ次ゝ陽中ハ陰。陰中乃陽ゝ事を忘ゝ
五声ハうゝりゝ之ハ能ゝ　はをのゝゝ叶ゝ呂律ゝ偏ゝ
時ハ呂を和ゝ也て愁ひゝ中ゝ之律ハ衰ひゝ失ゝてふ
しに數すくゝゝくして中ゝふゝ
也ゝて湯ゝ湯を付ゝ陰ゝ陰を付ゝて陽ハ陽和合せゝゝて
おゝゝろきゝゝゝ和合するを以て成就とゝ

一祝言ゝうおくハ聲のゝゝちを和事　花傳書ニ
憶
也も呂律の二ゝ所ゝり出ゝり　呂ハゝゝゝ声出る息也
祝言ハ声ハ機を祈ゝて機ゝ声ハ付て出ゝ故足強キ
音聲ゝて呂の声ハ性根なり機をゝりて強き声を息を
出ゝ義にゝるゝ呂ゝく祝声ゝゝは祝言第一也

律ハ悲しむ声入息なりまうおく乃聲といふハ声を拵へて機をゆるく拵ル柔に弱き心あり機を後く拵ハ入息乃心なりまうおくこと乃有く去程に程なく声ハ機をたゝ故に調子ハ甲乙を癖ゝまうおくハ機を後く拵故に調子の乙乙をなせり

入息出ル息ハ呂律の正まるすごとく笛のホウヒイて安く云ふこゝろなくを小史の笑ふ声と泣き声とを考へ

一横竪之事　　経緯

此横竪ハ音曲乃とゝ也あしく吟味すべき事なり

徳の拍子を正ハいよ乃及ぶ羽同答文ゝど記全拵ハ文句

ゝ速く有ル事ハ笛数を数ふると名儀乃ゝ

此一道首尾始末横竪のたゝ事ハなしかより天地乃君

物ゝて横竪ハ記事なる記乃記なるハ拵ハしかあ乃也

たとへを正直といふと正ハ横直ハ竪なりたてよこ偏らぬを正

直といふ如し枝徳曲ハ上に付ていそで

竪　大鼓　　横　小鼓

ゝくそういまゝ　　あけさ節よ

陰　　陽

音声竪　　音声横

ゝくそういまゝ　　あけさ節よ

たゝひようけを　　みゆかゝこ

たゝてをゝく　　そて拵ゝけ

陽　　陰

甲　上音　ハ　　乙　下音　ハ

ふゝ記時の佐陽なり

是ハ曲舞ゝの音声なり

起 ウク　伏 ニツヽ

右九画りまて是を云こと拘はたらかまは竪糸ハ臺にそり為
かけ玉横糸ハ横(ヒ)まて運動(ウントウ)しうたひハ文字を竪ものしゝ故
横糸ふして是を織こゝ所ハ即(スナハ)ち音声なり織やう或ハ
文字を或はたらみ所まは地村ありて深多まて悪し風を
其如く苞角むつかしを九をれ故大敬九るをた
り九やうよ孤ふと教やるハ竪のるをハルふ一多くを一是安
九在に是を拵(コサ)ゆ敬ふなり小敬九るを拵きやうよと教
やるハ横九るハ下九ふ一多くを居つき安九在に是を引立
所心なり故して文句拘ふ九作べき音声の陽を付ゝ文句

拘ふ九陽ハ音声の陰を含ハ是曲葉かまて作陽和俗
文句如一乃糸紋音声村ふく織出せるなり陽中九作陰
中九陽と編一又ハ甲(ハル)乙(ハル)。乙ハ甲とを一やるも皆ハ九理也
勿論拘子の下ろうよあ一ハ或は文字ハ九ふとのごとき音
声九伏ふく居つき安九所まてハ起一てハル氣をふくこと或は
上端(ハ)又化ふ所ふと乃甲書に乃ゆりやす九不まてハ乙九拵(スナ)
ゆる九を拵ふく遠(ウタ)ハ乙る皆ハ九ふなり又曰文字九大きなるき
ふ色九を婦ふと是皆文字九ふまゝぬ故ふり ふまゝ悪文
字を浮(ウク)是衣織ふ九下ふ也(文字のをきも是のなる乙九ふりうこと云
也ハ紀ハをきを婦ふ但の糸ハ各別)
但ふ一ま拵引ハ各別よて文ふくふ一ハ之事也是ハ遠の

紋(モン)ともゆかるを也ーて祇園の文字きだうたゆ所こゆーを
ちに織ゆかれしまちを弁(ワキマ)へ
△たゆは織布を織ゆ経(タテ)の糸より緯(ヌキ)乃糸ハおもあ横ー経
緯日ーおりあまて織付ハぬきかちて地あひきろ〻ゆ織ひの
文句七文乃文字の内七文字を大数れ間に付合ふ文字とゆ
数の乃に分ちゆ也ゆ文字乃横先まて情傷たてぬきのさちち
分ゆ知をー

一拍子あひ乃事

拍子ハ規矩準縄(キクジュンジョウ)すて拙も親味(シンミ)れ乃を習へー

△中ゆ知交こつれ〻ちく通ゆ習ごーとも又

をーかへて也やうしれたとゆは

中ゆ知夫婦うしーちゆ乃を

△皆人毎に拍子ゆ乃ちを毎ゆ乃を毎ゆ乃ハ僻言(ヒガコト)なり

丁(チョウ)ど合ふ乃を毎ゆ乃ハ入乃字ゆ乃を毎ゆ乃ハ初(ショ)ゆ

毎知ーゆ乃を毎り拍子をゆせがまちきて大ゆ婦ゆ乃り

取謀ゆ乃ゆは世作ゆうゆくありされゆ移拍子也

△親(シンシ)きを拍子ゆて数と猛と中更く祇ゆ乃是ハ味れ

方へかゆうゆ乃の不拍子とゆ

△数ゆうゆをゆーと数ゆ合する事ゆ乃り先も祇やう

まて数ゆうゆやすやうまぬゆ

△古書ニ君臣ハ役トシテハ小唄ハうたひ君ニて敬臣ニ為
ヨリ外ニてうかゝひくせアル曲舞ハ敬君ニて慈ひ臣
なるたより家ひて祝ひやうと為て曲舞ハ
内ニて敬ニ徳ヲ示ときこ祝ひまてこそ新ニて其
外ニも縁多たり
△うけ押の拍子ハ下ニ乃慈を必拍子ハ祝を不待
してよく生さ物なり祝を待さうけて乃拍子
也ヲ見ル知ベされを慈て敬を遊ぶ為なり
古歌 角ハ物のかゝてむけらしや
只何ごとをまろくやせよ

丸くともかと一川あるものこそ物
ハのまりまる物きはまろひ安きに
此二首の心を以て御手すさびに
一新切謡出しまる拍子とらるる
ヲ切ハ 竜女変成ときく時ハ
ヲ切ヲ かゝて雲とゆけゝいすり
ヤ 清水寺ハ観音乃こゑ
ヤア さかきこそ人こゝろ
ヤラ ゝてこそ源平よ
ヤヤ ゝれもものゝこゝハ

手切て出る所右の川の外ハ前ハ或ハ地行地引ゑよ手也

一進退の歩拍子とゝのゑる　かく歩拍子　すむ拍子　中　をく歩拍子　ぬく拍子

△東北　三河のくるゑ

△鎖　惰々ゝとこゝろ手

△雲森　陸ハ表裏ゝ蔵るハ　裏のうちよりかく歩ゝ

裏を不治すみて出ス

裏をゝゝ治をゝれて出ス

△融　池辺ゝきに宿ゝ多ゝ引を八　千本ノ手ゝをゝて奥ゝ出

一手ゝ歩拍子とゝのゑる

素飛の時手切居所ゝ見乃歩子拍子ゝ手なり

△不ハこゝ歩の　ゝゝゝゝ手出ス　○○○○飛出ス

又相手ノ三世十方ノ手切なとも用ゆ其時ゝ又拍子ノ執也

一七ツ拍子とゝのゑハ

仕舞の拍子ゝ
ゝゝも飛ゝ入
ゝゝハゝぶき
ゝゝぶき
中の拍子
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝどゝ

此拍子ハ拍子の名なり い拍子の内
手ゝ入拍子ゝ三角なりて ハ拍
余のひゝゝ一ハ入拍子
をゝ入拍子ゝ新ス式
なゝて何もゝやすなり

一手一拍子とゝのゑも素飛の歩拍子なり

△陽ゝむゝ歩ゝかくハ又引○長次ゝて一ツ手ゝ

△ゝて歩ゝ叶ゝ三ゝ人ゝ不引○かて歩きゝくゝ

△所々ゝ歩ゝ引ゝ未ニ一ツ手

拍子の扇なくてハ必引まゝ出るあしひきをゝく
止ハきこゝあれ扇拍子なり

一末(スエ)の拍子といふも扇拍子なり

△ゝ重竿おれ引(ヒク)ハ。をゝ引 重竿しと書いて出るハ無き拍子

一四(ミ)拍子といふハ引れのゝれ扇拍子をも四拍子

拍子をも四拍子

△かくてもあひきかへ重おやまれちれ引きせ子云

ふりきの家となりゝ

一松拍子といふハ頭乃ふりやうまて出るゝ云

一今合(コンガフ)ゝ重ゝとて唱ゆゝ時ハ切井上のゝを扇拍子

うたゝ子有をゝ

△実ためゝ重ゝ。ほとけ(ホトケ)モモトハステヨ。仏もゝとハ捨しゝもの

もハ後のまと扇ひやうゝ佐ちゝひてハ無益のゝ之

一口舌心(コウゼツシン)の事 もヲ三曲ト云 喉舌唇三内(ナイ)のゝハ音伎の者ニ祇乃

口ゝ舌ゝ扇れ之の叶ひてゝ

口 舌 心乃音曲と ゝ

之文字あつゝひなぎやたすゝくゝと違ひあれ不光口れきて

ゝるなり表上に彼名使ひ能いひゝけ文字ゝ実乃入り

てゝもゝぶれきれもなくかゝくゝ孤なゝ不舌曲ゝり心

ゝは方法乃こゝゝ不なり

△口中ハ狹(クチ)け　舌ハ自中に働くやうにして舌端にきりぎ
りなるやきゝ不粧ひ乃事也但口さと狹く働くやうにするハ悪し
口ハ開き過るも悪敷く又唇ハ一向動かぬも宜し
△口ハ龍角口内よりかゝりを入へしなり
△文字ハ大小を唇に唇乃平と平と合時は文字大きく
なり唇をかさねる心より合れた文字こゝやうなり是を元
音とす　但是ハ其人ハ生付も依へし
△舌ハ湖蔓子(コロベ)をゑに是如くつゝまへしとゝ彩たし
行事に唇ゝず能働くが舌但舌先計をつゝくハ悪し
口乃内おもゝ能かきれ清ゝ

△下音為る下ハ下れ下りかゝるハ遠口先よりゝ必強をつく
舌ハけ物也又それを好ひ舌ハ根をつゝまて舌の時ハ音よ
ゝ長くなり也ゝ
△入ルうたひ口先より時ハ奥へ入乃をくおく迄行てハ出る道
遠かりゝ故事途にさげて口へ出るにより下ルゝ下ルとゝ
勿論それより口へ出るまハ畠(ハタ)なく幅(ハバ)をとゝより狹(セバ)く文に
裕(ユタ)かゝ　但舌ハ根をつゝまて遠ふ時ハ口へ出る乃をくく口へ
出くハ又奥への乃をき故事途迄出るにより文字さえび
徒おりく出る也勿論それより行くへ入てハ音為る故

公乃ちゝ舌ハ舌ハ

下ルヿ後句ノ如ク花角等に舌ハまのゝ奥かと思ふ不
まて祝ひをゝりへを出るも入を道迫く上ヶ下ヶ自也まて幅
乃廣狹を裕ゑてゆゝ但舌ハ上斗ゝ居まて喉唇
ハ働きゝ紀ハ一向不自由ゝり此ゝ第一の事之動く物を
行住坐臥をゝ知へし

△鼻へ入ゝ聲ハ口へ出ると舌乃上に文字をくと等ハ舌ハ
く上あごを物ゝ也喉より舌ハ上をすりて物きやうゝ遠へ
△説文ニ詞言之氣ゝ鼻出與口相即也とゝり物をわざと鼻へ
遠をゝて行ハイカヽ又ゝも鼻へ氣のぬけ出やうゝするもイカヽ
自然とたすけゝ内ゝ音ハハハ

賤老若男女喜怒哀樂愛惡欲の七情迄去現生れ
ち鬼畜の類ひ相意に共ゑ代風心よて遊ぶすせ
是をどうどみともゆ仏あまり思ひ入ゑうハ底れ入ゑう
て始ゑるなり時節来氣自然の機縁あり
一心乃至所の事
確実ハ下まて遊ぶおとおりへをされる心眼にて風景又
物く祝りと思へは夫ゑ引きて遊ぶ或ハ哀ハ所
とおなへを又ゑに心をとゑ迄拍子ゑ拍子に
ちゑ物をとられ外がぬけ所あり花鳥風月聲をとられ
て曲を知ゑ曲拍子ゑく視ゑを知れ視ゑを忘れて拍子

を知ゑトゑ　我はひハを風。ハルハ所光皆それくゑ心を留
ますまゝ拍子れをゑへおりを角膝下に心を至て動ゑ
ちぬが能ゑとおりへを又それる光ゑて花やゑぬすかゝ式
心を能ゑひゑゑて何方へぬとも入用くゑ仕ゑが光ゑ
拍子とも共仕ゑる所をゑく動ゑる事ぬゑて光せ
ぬやうゑ一番次れ入用ゑをゑくうゑへ前を捨次へ改て
ちゑく元付を前後際動ゑて拍子ゑ
なり変ゑ一セイ知ゑゑて視出し音ゑ発ゑの　みちひなきト乃りて視ゑ次へ
のり知ゑて　とれをゑも　おゑく知也或ハ動ゑすゑゑ光せゑ
くゑゑく必ゑりとてハそれゑ光ゑして前れ視ゑにすゑ

如てゝどきゝ乃ひゝ独吟の曲舞なとをくたけて謡ふ所心を一所ふ居て（スヘ）ハ視ひ居ぬ所ありめ家公有へし

極意は一身ふ心を賦（クバ）て至て其人丸ものとまて仕ふ為き事絶妙（ヒヒレン）工夫の上に有へきすなり人丸乃時其所へ家へきと思へを行用ふ乃ぬけゞすなり敵を敵なと考に為り家ふ成ふ成時ふあれ物ふに心を賦てをゝ出方にあらく謡とこなふなり

本心如水　忘心如氷ノ（高乃こゝろ高ふ如氷ノ　それをうけむ乃こゝろ）

異相（イラウ）なれふをあらうけを元乃ひく

すくふ乃くき比をまるなふよ

一矩（カネ）乃位の事

第一文字を双へ平等ふ謡ふ後事なり又前の字を伸（ノバ）

まは後の字を乃ひ又前乃字を捨（ヒロ）へを後乃字ハ

伸ふなり先を寸六寸とも云寸世乃位とも昔よりの

定格也是を長短の示ともいひく文字ハ乃心の矩（カネ）也

人ふ面白ハせんとて前の字を伸て又後乃字をも寸法

ふ一に乃ぶまは一尺二寸ふなりて伸ふ天ふあ乃ぶ天る

くとゝふ程拍子ふ乃ふ成ふ乃

一序破急乃事　序ハ（ヒツカシ）破ハ（スヽム）急ハ（ハヤシ）

爾雅ニ序ハ緒也と云て緒を糸口と訓也糸ふ乃緒

見定め引出せは未迄も礼儀くずかし此序れ曲もさ
づろうろ礼やうにして不くと明く又静まるなれやう
よけする事也拙きとも序吟の時ハ表を出すに裏
ハさやきやうにものつゝ文やうるものなり
▲破を拍子れ常なるを守りすして破を拍子を拍又拍
を破り拍子よかくまくくきつもるれ或は拍にくて
て変ずるる文字を拍れいれ迄ても一方破るをいよなり
位いに拍子ハ拍子ハとも一やうれ方なる拍ねあ也
一拍子よ拍ハ下ものさなり拍拍を能く文あ也其
ひやうし表拍に破りつめ拾つあたるを破乃曲ろ也

▲急とハ急ハ急ハ拍ぬも急にたあ初ゝ礼曲するす
なり急也ものくよハ拍ハ急を拍へ
▲拍にて序破急ハ拍るよ破るへ急をとくて
芭蕉ニ　真行草あるの安きなり　走　かやうの不も序破急
一所冠乃事
破急ハ序ハそ拍出さはとも序不も序ろあ破て出さは破ろ
てとめ急ろく出さて急ハ急ハ序也急即ちく所冠の曲こい
ひく響む事也拍れ中拍ハ拍とと礼ものあ序ハ拍初さ
破位ろ急へ位破の拍ろて序乃ハ序ろあ序ろをうとん
もとをもる曲ろをもや也

一花傳書ニ曰只謠ハ聲ヶ拍を拍曲舞ハ拍子ヶ拍を拍方に
舞こゝろ字を曲にそへうち立て舞ッ わさなきは風体より
出る音声也昔ハ曲舞を各別乃ものさまてはなく祝ヶ
ハかりしを近代曲舞祝和ッけてふうたいよりを付て
祝ハ殊に面白くせめる方に為時ハ殊文曲舞れかゝ第一
乃歌ひとゝのまり 光を亡父世阿弥新也 申楽れ能ヶ曲舞を謠也
たるにより て此曲舞く歌ひ一也白拍の曲舞れ曲寛初ヶり
去程に曲舞ゝを れ曲を は大和うたひと作り曲舞れ也
乃こハ拍を和ッけ祝地ヶ 拍に曲の道かはゝちゝ
事曲舞れかを を拍とも面白きヶ肝要ヶれと

是を元ヶ事こゝはゝ ゝめ也拍曲舞謠ひ乃かりめと
ゝハ曲舞ハ拍子を拍ヶ祝ヶ曲なれを文字とを拍ヶ
拍よりて文字を白移をもかゝ一又拍子に引ゝに
なるく所しるまる章をきれた一ゝをにゝめえて面
白拍風ゝ光ハ拍子れ面白き性根ヶり去に依てか
ゝ面ゝるゝ ゝ一拍乃かをよゝ也光を曲舞かをを乃
風ゝ光ハ只謠とハ拍子をて かゝ乳事もなく只ゝ光
まくに謠ヶ故ヶ文字の章紛ゝれ去程に謠の脳脳
ゝれてゝことたゞ言ゝりまて一句一曲ヶ ゝる迄耳
ゝ面一面心を ゝ謠ヶ人もゝ人ゝ同心ヶ一曲感心

よ意氏法華経の正風を学び有に文字と句うつ
るを正ふり其内より上手れまざとりてよろ氏正を能ク家
と称なり正そむとん也ちまは声あやをあれといふ事也
一有紋無紋のあひとりて事　紋を紋よりつばと云
きとを白紋およ黒き紋ふ白紋およ白き紋ハ有紋とて姫
事也白き上に同一糸まてきろき紋或は濃茶れらへよ
濃茶乃紋を織ル色後代紋あり音声まてれ氏紋を付
事を云く聲文紋なるとりよ形ハ
佛説よ有心のふ説　無心れてろといよ事ふ
有心ハ笑すふ心とて獅よ事也